

# 高齢者の主観的幸福感に関する検討

## —生活時間に注目して\*1—

智原 あゆみ

(関西学院大学大学院)

### 【論文要旨】

本稿の目的は、高齢者（65-80 歳）の主観的幸福感に対する生活時間（家事時間・趣味時間）の影響を明らかにすることである。生活時間の主観的幸福感への影響を確認するために、分析対象を 65-80 歳に限定した上で、主観的幸福感を従属変数、属性、社会経済的地位、および生活時間（家事時間・趣味時間）を独立変数として投入した重回帰分析を男女別に実施した。その結果、主観的幸福感に対して男女ともに趣味時間がプラスの効果を与えること、家事時間については男女ともに影響は見られないことが明らかになった。また、それらの知見に加えて、高齢男性においては主観的幸福感に対して社会経済的地位に関する変数の効果が見られるものの、高齢女性においては社会経済的地位に関する変数の影響はほとんど見られないことが確認された。

キーワード：主観的幸福感、生活時間、高齢者

## 1. 問題の所在

本稿の目的は、現代日本社会における高齢者（65-80 歳）の主観的幸福感に対する生活時間（家事時間、趣味時間）の影響を明らかにすることである。

現在日本社会の高齢化率<sup>2</sup>は 27.3%に達しており（内閣府 2017）、高齢者が人口の約 4 分の 1 を占める超高齢社会を迎えている。また、高齢化は社会だけではなく、個人の人生においても老後の長期化という変化を及ぼしている。現在の日本人の平均寿命は男性 80.98 年、女性 87.14 年（厚生労働省 2017）となっており、多くの人々が 60 歳前後で定年を迎え職場を退職すると仮定すると、退職してからの老後の期間は約 20 年にも及んでいる。

このような状況から、高齢者の人々が何によって幸福を感じているのかを把握することは現代日本社会にとって重要な課題であると考えられる。2015 年社会階層と社会移動調査（以下、2015 年 SSM 調査）では調査対象者がこれまでの 20-69 歳の男女から 20-79 歳の男女に拡大されており、これまでの調査よりも高齢者層について詳細な検討を行うことが可能となっている。高齢者の幸福感を解明していくにあたり、高齢者は現役世代とは異なりこれまでの主観的幸福感に関する研究で検討がなされてきた職業や学歴、収入などの社会経済的地位

<sup>1</sup> 本研究は、JSPS 科研費 JP25000001 の助成を受けたものです。

<sup>2</sup> 平成 28 年 10 月 1 日時点の高齢化率（65 歳以上の人口が全人口に占める割合）。65 歳以上の高齢者人口は男性 1,500 万人、女性 1,959 万人となっている（内閣府 2017）。

といった要素だけではその日々の暮らし向きを十分に捉えられない可能性がある。そこで、本研究においては人々が日々どのような生活を送っているのかを表す指標のひとつである生活時間に注目していく。

高齢期を迎えるにあたり、多くの人々がそれまでの人生で多くの時間を費やしてきた仕事からのリタイアを経験する。仕事はそれまでの日常生活において多くの時間を割く行動であったとともに、働くこと自体が人々にとって生きがいとなっていたケースも多いと考えられる。高齢期においてこれまで仕事に費やしてきた時間を自由に活用することができると仮定すると、それは何かをしたいという目的を持つ人々にとっては自由に行動できる時間が増え趣味の活動や社会参加などを通して生きがいを創出していく機会となり得る。しかし、一方でとくに取り組みたいこともなく、その時間を持て余してしまう人々にとっては何もすることのない時間はかえって生きがいを感じにくくしてしまい、幸福感が下がることも予想される。先行研究においても、先進社会において高齢者の幸福を考えていく際には「生きがい」といった個人の自己充足的な面にも注目していくことが重要であることが指摘されている（高橋・和田 2001）。そこで、本研究においては、日々の生活の中で家事や趣味といった何らかの活動に費やす時間が人々の幸福感にどのような影響を与えるのかに注目した上で、主観的幸福感に対する生活時間の効果を検討していく。

## 2. 先行研究

### 2-1. 主観的幸福感に関する計量的研究

現代日本社会における主観的幸福感について全年代を対象として総合的に検討した研究として、宍戸・佐々木（2011）がある。宍戸・佐々木は Japanese General Social Surveys（以下 JGSS）の 2000-2010 のデータを使用し、主観的幸福感の規定要因を属性的要因、経済的要因、社会関係的要因といった多様な指標を用いて検討を行っている。その分析においては、主観的幸福感に対して、年齢、性別、婚姻状況、学歴、就労状態、所得、社会関係の有無といった要因の効果が確認されている。

次に高齢者に限定した上で幸福感に注目した研究として、直井（2001）が挙げられる。直井は家族関係や友人関係、余暇行動、夫婦関係といった要素に注目しながら、それぞれの要素の幸福感<sup>3</sup>への影響を検討している。その結果、①家族・友人関係については、配偶者の有無が幸福感に最も影響を与えており、子供の有無や子供との同居は幸福感にはほとんど影響を与えていないこと、また、男性においては友人との交際頻度が幸福感を高め、女性においては親族との交際が幸福感を高めること、②余暇行動に関しては、外出回数が幸福感に寄与することが明らかにされている。これらに加えて、幸福感に対する属性や社会経済的地位の

---

<sup>3</sup> 直井（2001）では幸福感の測定には 17 の質問からなる PGC モラール尺度が用いられている。

影響として、男性においては就労者の幸福感が高いこと、女性においては世帯収入が影響を与えていることが確認されている。また、健康度は男女ともに幸福感と関連が高いことも指摘されている。

さらに、高齢者の主観的幸福感の規定要因に関して全国調査データを用いて検討した研究として、宍戸（2007）が挙げられる。宍戸は JGSS2000/2001 の統合データを用い、高齢前期（60-74 歳層）の主観的幸福感の規定要因を、就労状態、家族関係、地域活動への参加、余暇活動の 4 つの領域に注目し、男女別に検討を行っている。分析の結果、高齢男性において配偶者の存在や子供の同居といった家族領域の要素が影響を与えること、高齢女性においては地域社会での集団参加といった余暇活動領域での活動の影響を受けることが指摘されている。

これらの先行研究の知見から、高齢者の主観的幸福感の規定要因を検討していく際には、全年代を対象とした分析で検討されてきた属性や社会経済的地位といった要因に加えて、同居の有無や余暇領域の活動といった要素についても検討していくことが重要であると考えられる。

## 2-2. 生活時間に関する研究

生活時間に関する研究は、これまで性別や年代といった人々の属性によって 1 日の時間の使い方に違いがあるのかを中心として研究が蓄積されてきた。

近年の高齢者の生活時間を検討したものとして、吉藤・渡辺（2017）がある。この研究においては NHK が実施する生活時間調査のデータを用い、高齢者の時間の使い方にどのような特徴が見られるのかを明らかにしている。その結果として、仕事や家事といった「拘束行動」に費やす時間が 60 代以降は年齢があがるにつれて短くなっていくこと、そうして減った分の時間をレジャー活動などの「自由行動」に振り分けていくことが指摘されている。家事時間は女性についてはそれまでの世代と高齢者の間に大きな違いはないものの、男性においては家事をする人が 70 代前半まで漸増することが指摘されている。また、レジャー時間については、男女ともに高齢者において増加しており、70 代前半で活動のピークを迎えその後費やす時間が減少していくことが明らかにされている。

生活時間を社会階層との関連に注目し検討した研究としては、石田・佐藤がある（2016）。国民生活基本調査データを用いた分析の結果、有業者の多い 20-59 歳の男女においては、余暇時間の配分のうち休日の生活時間（時間の使い方）には社会階層間で格差・差異があることが指摘されている。

生活時間については、これまでその構造に注目しそれらの特徴を記述することやそれが集団によってどのように異なっているのかに関しては検討が重ねられてきた。しかし、生活時間そのものを人々の暮らし方を反映した指標とみなし、それを用いて人々の意識といった別

の事象を説明するといった試みはこれまであまり研究が蓄積されていない。先行研究では20-59歳の現役世代においては、時間の使い方には階層による差があることが確認されており、生活時間は仕事を退職し老後の生活を送る高齢者の階層といった側面を捉えられる可能性もあると考えられる。そこで、本稿においては、生活時間の主観的幸福感に対する効果を検討していく。

### 2-3. 分析枠組み

2015年SSM調査の留置調査票には、家事（育児・介護を含む）と、趣味・娯楽・交際などの行動に対して、各行動に費やす時間について平日と休日を区別して尋ねる項目が含まれている。本稿では家事に費やす時間（以下、家事時間）と、趣味・娯楽・交際などに費やす時間（以下、趣味時間）の2項目を生活時間とした上で、生活時間の主観的幸福感に対する効果を検討する。

また、平日の生活時間と休日の生活時間に関して、仕事をしている年代においては平日と休日で過ごし方に差があるものの、高齢者においてはその間に差が小さいことが確認されている（渡辺 2011）。そこで、本分析において高齢者の主観的幸福感への生活時間の影響を分析していく際には、一週間のうちで占める割合が大きい平日の生活時間を分析の際に用いる。

本稿では生活時間を家事時間と趣味時間の2つの側面から捉えている。家事時間については、家事は生活をしていくために世帯の中で誰かがやらなければならない活動であり、人々にとって義務的な側面が強いと考えられる。そのため、家事は取り組むべき仕事があるという意味では生きがいにもつながり幸福感を高める可能性はあるものの、働いていて時間がない人や家事に不慣れな人にとっては負担となることが予想される。また、家事は女性にとってはこれまでから継続的に行ってきた人も多く高齢女性においても精神的に特別大きな負担にはならないことが多いと予想される。また、女性においては、家事は仕事に近い面もあり、それに取り組むことで生きがいを感じるといった場合もあり得るだろう。しかし、高齢男性にとっての家事は多くの人にとっては仕事を退職し家で過ごす時間が増えることではじめて直面する問題であり、女性と比べると慣れない活動であるため精神的な負担になりやすいと考えられる。そのため、家事時間については、性別によって活動の意味合いが異なるため、主観的幸福感に対する影響も異なることが予想される。

一方で、趣味時間については、あらゆる人々にとって自分のやりたいことに取り組める自由な時間であり、その時間における活動は自己実現的な側面が強く、生きがいにもつながりやすいと考えられる。そのため、男女問わず趣味時間は主観的幸福感を高めることが予想される。そこで、本稿においては生活時間と主観的幸福感との関係について以下の仮説を立て、男女別に高齢者の主観的幸福感に対する生活時間の効果を確認する。

仮説 1：高齢層（65-80 歳）の男性においては、趣味時間が長いことは主観的幸福感に対してプラスの効果を持つものの、家事時間が長いことはマイナスの効果を持つ。

仮説 2：高齢層（65-80 歳）の女性においては、家事時間・趣味時間ともにそれらの活動に費やす時間が長いことが主観的幸福感にプラスの効果を持つ。

以上の 2 つの仮説に対して、2015 年 SSM 調査の分析を通して検討を行う。

### 3. データと変数

#### 3-1. データ

本分析では、SSM2015 面接票、留置票（2017 年 2 月 27 日版（070））のデータを用いて分析を行う。なお、本稿では高齢者を分析対象とするため、年齢を 65-80 歳に限定した上で分析を実施した。

#### 3-2. 従属変数

2015 年 SSM 調査では、留置調査票の間 1 において、「現在、あなたはどの程度幸せですか。」「とても幸せ」を 10 点、「とても不幸」を 0 点とすると、何点くらいになると思いますか。いずれかの数字をひとつだけ○で囲んでください。」との形式で回答者に主観的幸福感を尋ねている。本分析においてはこの質問項目を用いて主観的幸福感について検討を行う。

なお、主観的幸福感の基本統計量は、65-80 歳男性については、平均値は 6.32、標準偏差は 1.851 (N=1091)、65-80 歳女性については、平均値は 6.61、標準偏差は 1.928 (N=1184) であった。なお、高齢者の主観的幸福感の男女別の分布は図 1 の通りである。

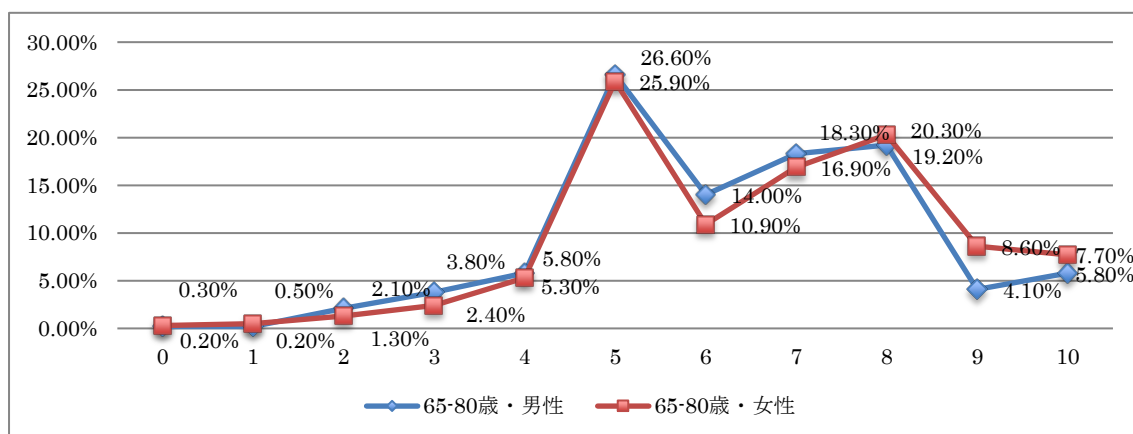


図 1 高齢者の主観的幸福感の分布（男女別）

### 3-3. 独立変数

本分析においては、まず先行研究で指摘された基本属性や社会経済的地位の効果を確認するために、年齢（実数値）、婚姻状況（現在の配偶者有無）、雇用形態（正規雇用、非正規雇用、自営・家族従業者、無職）、学歴（中学校、高校、短大・専門学校、大学・大学院）、世帯収入（世帯年収に各カテゴリの平均値を置換）を分析に投入する。また、生活時間に影響を与えると考えられる健康状態、および同居人数については、分析の際に統制した上で生活時間の効果を検討した。

本分析において注目する生活時間は、2015 年 SSM 調査の留置調査票問 11 で調査対象者に尋ねられている。「あなたは、家事（育児・介護を含む）と、趣味・娯楽・交際などにふだん 1 日あたりおおよそ何時間費やしていますか。」との質問に対し、ア）家事（育児・介護を含む）、イ）趣味・娯楽・交際などの各項目に対して平日および休日のそれぞれの行動に費やす時間を尋ねている。本分析では、平日の家事時間、平日の趣味時間に費やす時間を分単位に換算した上で分析に用いた。

なお、高齢者の家事時間の基本統計量<sup>4</sup>は、男性において平均値は 70.34 分、標準偏差は 90.388（N=990）、女性においては、平均値は 243.54 分、標準偏差は 176.640（N=1142）であった。また趣味時間の基本統計量<sup>5</sup>は、男性において平均値は 137.99 分、標準偏差 127.425（N=1014）、女性においては、平均値は 155.95 分、標準偏差は 119.530（N=1125）であった。高齢者の男女別の家事時間、趣味時間の構成比率を示したものが図 2、3 である。

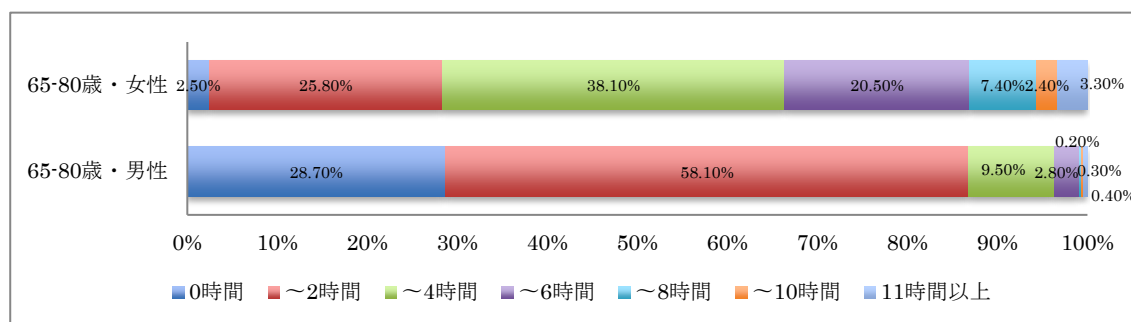


図 2 高齢者の家事時間構成分布（男女別）

<sup>4</sup> 平成 28 年社会生活基本調査の結果によると、65-79 歳の家事時間（週全体の平均値、家事の項目に対する回答時間のみ、介護・育児は含まない）は、男性において 37 分、女性において 192 分であった（総務省統計局 2017）。

<sup>5</sup> 平成 28 年社会生活基本調査の結果によると、65-79 歳の趣味・娯楽・交際時間（週全体の平均値、趣味・娯楽、スポーツ、ボランティア活動・社会参加活動、交際・付き合いの合計）は、男性において 112 分、女性において 82 分であった（総務省統計局 2017）。

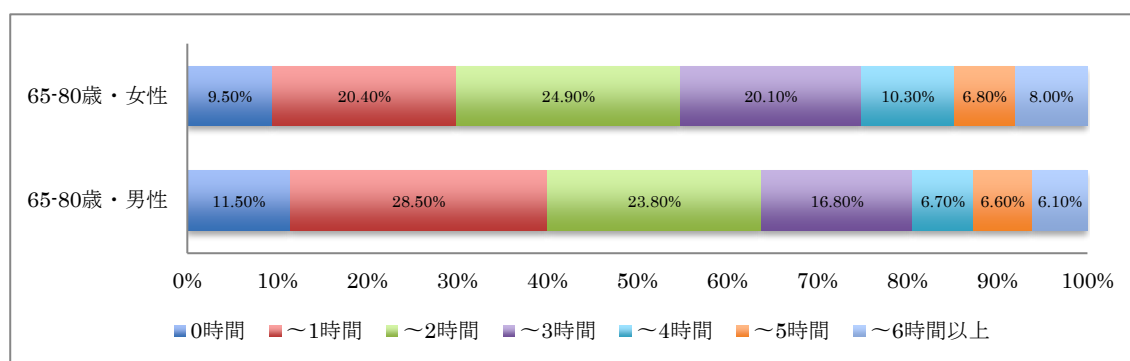


図 3 高齢者の趣味時間構成分布（男女別）

### 3-4. 分析モデル

本稿においては、分析対象を 65・80 歳に限定した上で主観的幸福感を従属変数とした重回帰分析を行った。主観的幸福感に関する先行研究において、高齢者、現役世代ともに男女で規定要因が異なることが指摘されている（宍戸 2007, 宍戸・佐々木 2011）。また、生活時間については、2・3 でも言及したように家事時間が持つ意味は男性と女性とでは大きく異なることが予想される。これらの点を踏まえ、本稿でも男女で全体を区分した上で分析を実施する。

まず Model1（・4）においては、基本属性（年齢、婚姻状況）および社会経済的地位（雇用形態、学歴、世帯収入）の主観的幸福感に対する効果の検討を行った。次に Model2（・5）においては Model1 の変数に加え、家事時間および趣味時間に影響を与えられ同居人数、健康状態の変数を投入し、それらの変数の主観的幸福感に対する効果を検討した。最後に、Model3（・6）においては、家事時間、および趣味時間の変数を投入し、それらの変数が主観的幸福感に対して影響を与えているかどうかを確認した。

重回帰分析に用いた変数の概要は表 1 に、基本統計量は表 2 に記した。

表 1 使用変数の概要

変数名	概要
従属変数	
主観的幸福感	「現在、あなたはどの程度幸せですか。『とても幸せ』を10点、『とても不幸』を0点とすると、何点くらいになると思いますか。いずれかの数字をひとつだけ○で囲んでください。」(0-10の11段階)
独立変数	
年齢	年齢の実数値
婚姻状況(ref=配偶者なし)	0.現在配偶者なし 1.現在配偶者あり
雇用形態(ref=正規雇用)	
非正規雇用	非正規雇用が1、それ以外が0
自営業・家族従業者	自営業主・自由業者、家族従業者が1、それ以外が0
無職	現在仕事をしていない者(学生を含む)が1、それ以外が0
最終学歴(ref=中学校)	
高校	高校が1、それ以外が0
短大・専門学校	短大、専門学校が1、それ以外が0
大学・大学院	大学、大学院が1、それ以外が0
世帯収入	世帯収入(年収・30段階)を各カテゴリの平均値で置換した値
健康状態	「あなたは、現在のご自分の健康状態をどう思いますか。当てはまる番号に○をつけてください。」: 1.とてもよい〜5.わるい→5.とてもよい〜1.悪いとなるよう値を割り当てた。
同居人数	現在同居している人数の実数値
家事時間(平日)	平日の家事時間(介護・育児を含む)を分単位に変換した値
趣味時間(平日)	平日の趣味・娯楽・交際時間を分単位に変換した値

表 2 基本統計量

	65-80歳			
	男性		女性	
	Mean	S.D.	Mean	S.D.
主観的幸福感	6.36	1.834	6.62	1.910
年齢	71.22	4.382	71.66	4.621
婚姻状況(ref=配偶者なし)				
配偶者あり	0.88	0.323	0.69	0.465
雇用形態(ref=正規雇用)				
非正規雇用	0.15	0.356	0.12	0.320
自営業・家族従業者	0.17	0.374	0.10	0.299
無職	0.59	0.492	0.75	0.435
最終学歴(ref=中学校)				
高校	0.45	0.497	0.47	0.500
短大・専門学校	0.04	0.197	0.15	0.362
大学・大学院	0.26	0.440	0.05	0.217
世帯収入	469.08	343.069	401.72	304.233
同居人数	2.53	1.193	2.25	1.157
健康状態	3.13	1.014	3.16	1.002
家事時間(平日)	71.39	85.246	251.22	179.699
趣味時間(平日)	139.34	123.714	157.77	117.570



## 4. 分析結果

### 4-1. 重回帰分析結果（65-80 歳男性）

まず、高齢者の男性についての分析結果（表 3）を検討していく。

Model1 を見ると、婚姻状況および世帯収入が 1%水準で、学歴（大学・大学院）が 5%水準で、学歴（高校）が 10%水準で、それぞれ主観的幸福感に対してプラスの効果を持つことが確認された。属性や社会経済的地位に関する変数の中でも婚姻状況や収入といった日々の生活に直接影響しやすい要因が強い影響を与えている傾向が見てとれる。

Model2 では、Model1 に加え同居人数と健康状態を投入した。その結果、健康状態が 1%水準でプラスの効果を持つことが確認された。やはり、高齢者の幸福においては健康であることが重要であることがこの結果から見て取れる。

最後に、Model3 において、家事時間および趣味時間を投入した。65-80 歳の男性においては、5%水準以下で有意な変数は確認されず、趣味時間が 10%水準でプラスの効果を与えていた。他の変数と比較するとそれほど影響は強くないものの、趣味時間が多いことは高齢男性の主観的幸福感を高めることにつながることが確認された。

### 4-2. 重回帰分析結果（65-80 歳女性）

次に、65-80 歳の女性の分析結果（表 4）を確認する。

まず Model4 の分析の結果、1%水準で世帯収入の効果が確認されたものの、それ以外の変数の効果は確認されなかった。男性と同様、女性においても日々の生活に直接影響しやすい収入といった要因が強い影響を与えている傾向が見てとれる。

Model5 で同居人数と健康状態を投入したところ、健康状態が 1%水準でプラスの効果を持つこと、10%水準で年齢がプラスの効果を持つことが確認された。高齢層の男性と同様、健康であることは高齢層の女性の幸福にとっても強い影響を与えていることがわかる。なお、Model4 で効果が確認されていた世帯収入については、健康状態を投入すると有意ではなくなった。

最後に、Model6 で家事時間、趣味時間を投入した結果、趣味時間が 5%水準でプラスの効果を持つことが確認された。高齢層の女性においては男性と比較すると影響の見られる変数が少ないものの、趣味時間が多いことが高齢女性の幸福度を高める可能性が示唆された。

表 3 65-80 歳男性重回帰分析結果

		65-80歳男性					
		Model1		Model2		Model3	
		$\beta$	S.E.	$\beta$	S.E.	$\beta$	S.E.
(定数)		**	1.131	**	1.158	**	1.171
年齢		0.014	0.015	0.011	0.015	0.017	0.016
婚姻状況 (ref: 配偶者なし)	配偶者あり	0.166 **	0.203	0.160 **	0.214	0.156 **	0.215
雇用形態 (ref: 正規雇用)	非正規雇用	-0.061	0.275	-0.059	0.273	-0.061	0.273
	自営業・家族従業者	-0.057	0.268	-0.043	0.267	-0.045	0.267
	無職	-0.052	0.242	-0.034	0.241	-0.048	0.247
最終学歴 (ref: 中学校)	高校	0.084 †	0.161	0.085 †	0.161	0.083 †	0.161
	短大・専門学校	-0.017	0.345	-0.029	0.343	-0.034	0.344
	大学・大学院	0.108 *	0.185	0.093 *	0.186	0.080 †	0.189
世帯収入		0.209 **	0.000	0.215 **	0.000	0.215 **	0.000
同居人数				-0.037	0.061	-0.035	0.061
健康状態				0.125 **	0.064	0.125 **	0.064
家事時間(平日)						-0.022	0.001
趣味時間(平日)						0.062 †	0.001
調整済R <sup>2</sup>		0.100**		0.114**		0.115**	
R <sup>2</sup> の変化量		0.111**		0.016**		0.004	
N		745		745		745	

\*\*:p&lt;0.01, \*:p&lt;0.05, †:p&lt;0.10

表 4 65-80 歳女性重回帰分析結果

		65-80歳女性					
		Model4		Model5		Model6	
		$\beta$	S.E.	$\beta$	S.E.	$\beta$	S.E.
(定数)		**	1.255	†	1.230	†	1.228
年齢		0.055	0.016	0.069 †	0.016	0.073 †	0.016
婚姻状況 (ref: 配偶者なし)	配偶者あり	0.051	0.162	0.041	0.164	0.044	0.165
雇用形態 (ref: 正規雇用)	非正規雇用	-0.063	0.421	-0.051	0.400	-0.066	0.400
	自営業・家族従業者	-0.037	0.425	-0.030	0.404	-0.045	0.405
	無職	-0.050	0.379	-0.002	0.361	-0.039	0.366
最終学歴 (ref: 中学校)	高校	0.012	0.165	-0.015	0.157	-0.027	0.158
	短大・専門学校	0.042	0.222	0.020	0.213	0.008	0.214
	大学・大学院	0.040	0.347	0.003	0.333	-0.001	0.333
世帯収入		0.115 **	0.000	0.067	0.000	0.061	0.000
同居人数				0.034	0.069	0.038	0.069
健康状態				0.322 **	0.069	0.314 **	0.069
家事時間(平日)						0.018	0.000
趣味時間(平日)						0.090 *	0.001
調整済R <sup>2</sup>		0.014*		0.110**		0.116**	
R <sup>2</sup> の変化量		0.026*		0.097**		0.008*	
N		725		725		725	

\*\*:p&lt;0.01, \*:p&lt;0.05, †:p&lt;0.10

## 5. 考察

本稿では、高齢者の主観的幸福感に対する生活時間の効果を、性別ごとに検討を行った。分析結果をまとめると、以下の通りとなる。

- ①高齢男性における主観的幸福感に対する生活時間の効果は、家事時間は効果が見られず、趣味時間については 10%水準ではあるもののプラスの効果を持っていた。
- ②高齢女性における主観的幸福感に対する生活時間の効果は、家事時間は効果が見られず、趣味時間が 5%水準でプラスの効果を与えていた。

以上の結果から、高齢者の男性について立てた仮説 1 は、趣味時間が主観的幸福感に対してプラスの影響を与えていたものの、家事時間はマイナスの影響を与えていなかったため支持されなかった。家事時間が幸福感到にマイナスの効果を与えていなかった要因としては、高齢男性においては働いていた頃と比べると自由な時間が増えることから、家事といった義務的な側面の強い活動も幸福感を下げる程の精神的負担にはなりにくいといった可能性が考えられる。また、それだけでなく高齢男性においてはそもそも家事時間の総量自体が少ないといったこともこのことと関係していると考えられるだろう。

また、高齢者の女性についての仮説 2 についても、趣味時間については主観的幸福感に対してプラスの影響を与えていたものの、家事時間は影響が見られなかったため、仮説 2 は支持されなかった。やはり高齢女性にとっても趣味といった自分のやりたいことに割く時間が幸福を感じるためには重要であると考えられる。家事時間については、男性と同様、女性においても主観的幸福感に対する効果は確認されなかった。高齢女性にとって、家事は日々の仕事としてやりがいや生きがいを感じるほどポジティブな活動ではないものの、精神的に負担に感じるほどネガティブな活動ではないといったことが考えられるだろう。

また、高齢者の男性と女性の分析結果を比較すると、男性においては学歴や収入といった社会経済的地位の効果が比較的に見られるものの、女性においては主観的幸福感に対する社会経済的地位の効果はほとんど確認されなかった。属性と社会経済的地位のみを投入した Model1 と 4 を比較すると、男性の調整済  $R^2$  値が 0.100 であったのに対し、女性の調整済  $R^2$  値が 0.014 であることから、そのことが確認できる。このことから、とりわけ高齢者の女性の主観的幸福感を捉えるためには、属性や社会経済的地位以外の要因も視野にいれながら検討していく必要性が示唆されている。

最後に、本稿において主観的幸福感に対する生活時間の効果は確認されたものの、生活時間を他の分析に応用していくには課題が残されている。今回の分析では Model1 で属性、社会経済的な影響を確認した後、Model2 で同居人数と健康状態を、Model3 で家事時間と趣味時間といった生活時間を投入しているが、男女両方において生活時間に関する変数を投入し

でも調整済  $R^2$  値がわずかにしか増加していない。その原因については、そもそも生活時間が主観的幸福感に対して説明力が低いといった可能性も考慮しつつも、生活時間を家事時間や趣味時間といった 2 つの側面だけでなく、行動の目的ごとにより詳細に生活時間を区分した上で把握することを試みていく必要があるだろう。そうすることで、それぞれの行動に費やす時間が人々にとってどのような意味を持つのかをより詳細に検討していくことができ、人々の意識に与える影響なども検討できる可能性があると考えられる。今後の高齢者を対象とした分析においては、生活時間やそれ以外の高齢者の日常生活のあり方を反映した変数に注目し、それらの変数を用いてさまざまな事象を多様な側面から検討していく必要があると考えられる。

#### 〔文献〕

石田賢示・佐藤香, 2016, 「生活時間からみた「ゆとり」の社会階層間格差」『統計』67(8):14-19.  
厚生労働省, 2017, 『平成 28 年簡易生命表の概況』

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life16/dl/life16-15.pdf> (2018 年 1 月 30 日アクセス) .

内閣府, 2017, 『平成 29 年版 高齢社会白書』

[http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/zenbun/pdf/1s1s\\_01.pdf](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf) (2018 年 1 月 30 日アクセス) .

直井道子, 2001, 『幸福に老いるために：家族と福祉のサポート』勁草書房.

宍戸邦章, 2007, 「高齢期における幸福感規定要因の男女差について：JGSS-2000/2001

統合データに基づく検討」『JGSS で見た日本人の意識と行動：日本版 General Social Surveys 研究論文集 6(JGSS Research Series No.3)』：45-56.

宍戸邦章・佐々木尚之, 2011, 「日本人の幸福感：階層的 APC Analysis による JGSS 累積データ 2000-2010 の分析」『社会学評論』62(3):336-355.

総務省統計局, 2017, 『平成 28 年社会生活基本調査—生活時間に関する結果— 結果の概要・主要統計表』<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/pdf/gaiyou2.pdf> (2017 年 9 月 21 日アクセス) .

高橋勇悦・和田修一編, 2001, 『生きがいの社会学：高齢社会における幸福とは何か』弘文堂.

渡辺洋子, 2011, 「第Ⅱ部 4 章 シニア世代の生活」(=NHK 放送文化研究所編『日本人の生活時間・2010：NHK 国民生活時間調査』NHK 出版.)

吉藤昌代・渡辺洋子, 2017, 「国民生活時間調査から読み解く (1) 「超高齢社会」ニッポンの老後の生活」『放送研究と調査』67(4)：2-19.

謝辞：本研究は JSPS 科研費特別推進研究事業(課題番号 25000001)に伴う成果の一つであり、本データ使用にあたっては 2015 年 SSM 調査データ管理委員会の許可を得た。

## **The Relationship Between Subjective Well-Being of Elderly Persons and Time-Use in Contemporary Japan**

**Ayumi Chihara**  
**(Kwansei Gakuin University)**

### **Abstract**

This paper clarifies the effects of time -use on subjective well-being in elderly persons (65-80 years old). The relationship between subjective well-being and time-use was examined using multiple regression analysis. The dependent variable was subjective well-being, and the independent variables of this analysis were demographics, socio-economic status, and time-use (housework time and free time). It indicated that the amount of free time has a positive effect on subjective well-being in both men and women. In addition, socio-economic status affects subjective well-being in elderly men, but it has little effect in elderly women.

Keywords: subjective well-being, time-use, elderly persons